

# 週刊 武四郎

第5号

2018年(平成30年)5月9日(水)  
発行・松阪市

●毎月第二週は、  
松浦武四郎と北海道に  
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

## 百印百詩

武四郎さんが二度目の蝦夷地探検を終えて江差に戻って来た時のことです。頼三樹三郎という、のちに勤王の志士として安政の大獄で処刑される男と、この江差で出会います。三樹三郎は、『日本外史』で有名な儒学者頼山陽の三男で、志士というより詩人と呼んだ方がふさわしいような奔放で情熱的な男でした。

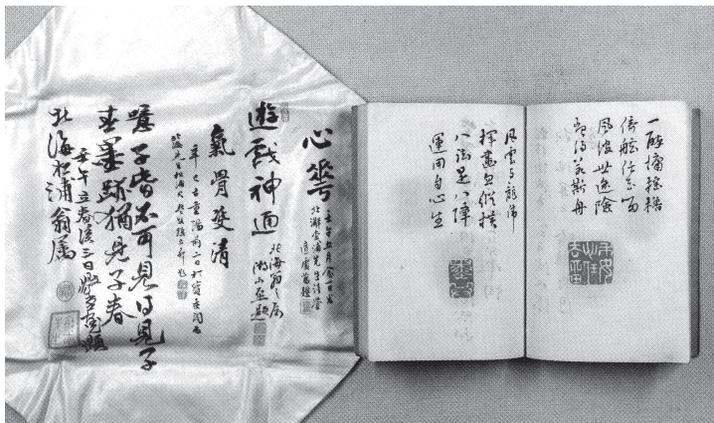
二人はすっかり意気投合して、お酒を飲むうちに互いが得意の詩と篆刻の技を競い合うことになりました。ちょうどお寺に投宿していたので同席していた人がお寺の鐘を撞き、鐘の音が響いている間に三樹三郎は詩を作り、武四郎はハンコの文字を刻むわけです。二人とも熱中するうちに何度も鐘をゴンゴン撞くので、町中の人々はすわ火

事か？ すわ異国船の来襲か？と大騒ぎになって、果ては役人までやってきて、二人は大いに怒られたそうです。「それならばいっそのこと一年で一番日が短い冬至に、一日百印百詩の会を開催しよう」ということになりました。

たとえば、〈清晨〉と、お題が参会者の間から出ると、三樹三郎はそれになんだ詩を作る。書き終わるまでに武四郎が手元の蚌石にその出されたお題の文字を刻むことができれば、武四郎の勝ち。先に三樹三郎が詩を作ったと詠み上げることができれば、三樹三郎の勝ち。前半は、三樹三郎の方が圧倒的に優勢でしたが後半はだんだんと苦吟しは

じめ、武四郎が印を刻む方が早くなってきたといひます。そして、日暮れ前に清課了引太白」というお題と共に、どうにか百印と、そして百詩が完成しました。もはや勝ちも負けもなく、武四郎と三樹三郎は参会者が驚嘆する中で抱き合って泣いて喜んだそうです。武四郎は、参会者から集めたお金をす

べて三樹三郎に渡しました。二人はそのあと痛飲し、そのまま布団を引つ張り合うように座敷にびろ寝して、そして翌朝には、武四郎は松前へと、三樹三郎は津軽海峡を渡って都へと別れていきました。また二人とも若くて、世の中にその名を知られる前の話です。



▲「一日百印百詩」漢詩頼三樹三郎、篆刻 松浦武四郎 弘化3年(1846)  
2度目の蝦夷地調査の後、江差で冬を越すために滞在していた武四郎は、頼山陽の息子三樹三郎と出会う。二人は意気投合し、一日のうちに武四郎が百の印、三樹三郎が百の詩を作るという「一日百印百詩の会」を催した。(松浦武四郎記念館蔵)

松浦武四郎 (1818 ~ 1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。

